アーシャ事務局よりお知らせ

アーシャ定時総会・報告会　日程のお知らせ

アーシャ定時総会・報告会の日程が決定いたしましたので、お知らせいたします。報告会では、現地で活躍する日本人スタッフ、インド人スタッフも出席予定です。現地の声を直接聞ける貴重な機会です。皆様のご参加をお待ちしております。

●日時　定時総会：2015年5月22日(金)13：00より
　　報告会　：2015年5月23日(土)13：00より
●会場　栃木県那須塩原市南郷屋５丁目１６３
　　健康長寿センター２Ｆ　ボランティアルーム
●議題　２０１４年度事業報告・決算報告
　　２０１５年度事業計画・予算書の承認など
☆正会員の皆様には後日ご案内をお送りいたします☆

アーシャ新拠点についてご報告とお願い

12月・2月に臨時理事会が開催され、アーシャ新拠点となる物件の候補地が決定しました。現在購入のための交渉を進めておりますが、募金額が不足しており、厳しい状況です。更なるご支援をお願いいたします！

継続教育学部　インターン・ボランティア募集！

現在、アラハバードでの活動をサポートしていただけるインターン・ボランティアを募集しています。特に、「手工芸品デザイン、在インド日本人消費者対応、有機農業組合活動、英語から日本語への翻訳」を担当して下さる方を募集中！詳細はホームページまたは事務局（Mail:info.jp@ashaasia.org TEL:0287-47-7840)までお問い合わせ下さい！

アーシャ事務局君嶋さん ご出産

事務局スタッフ君嶋みのりさんが無事ご出産され、事務局に遊びに来てくれました！君嶋さんからのメッセージを皆様にご紹介します。「1月3日に次男を出産しました 。退院後は家事、育児、家業の農業の手伝いに追われる日々を送っております。先日、久しぶりに事務所に行き、アーシャ理事の方々に赤ちゃんを抱っこしていただきました。写真は、その時のものです。また皆様に会えるのを楽しみに、子育てに励みたいと思います。」出産の直前まで、アーシャの仕事で大忙しだった君嶋さんと、赤ちゃんの元気な様子に安心しました！

左から、赤ちゃんの訪問に嬉しさ溢れる牧野理事長、2児のママになった君嶋さんと赤ちゃん、赤ちゃん訪問に癒される事務局丹羽

●会費・寄付納入者名簿●　2014.11.11～2015.3.3　○は新入会員。順不同、敬称略

正会員・賛助会員の皆様、ご寄付をお送りいただきました皆様のご支援により、アーシャの活動が支えられております。ぜひ継続的なご支援をよろしくお願いいたします。

誤字・記載漏れがございましたらご面倒でも事務局までご連絡下さい。よろしくお願いいたします。

個人正会員

個人賛助会員

ご寄付

クリスマス募金

10周年記念募金

■**会費**　個人正会員 5,000円　団体正会員 20,000円　終身個人正会員 50,000円（正会員は総会議決権があります）
　　個人賛助会員 3,000円　団体賛助会員 10,000円　終身個人賛助会員 30,000円
■**郵便振替**　加入者名：アーシャ=アジアの農民と歩む会　口座番号：００１６０－０－３１５１４７

特定非営利活動法人 アーシャ＝アジアの農民と歩む会　☆この会報はインド・アラハバードで製作印刷されています☆
<事務局・交流センター> 〒329-2705 栃木県那須塩原市南郷屋4-28-4 B202　TEL/FAX：0287-47-7840
事務局　丹羽 寿美　君嶋 みのり　E-MAIL：info.jp@ashaasia.org
アーシャ＝アジアの農民と歩む会ホームページ：http://www.ashaasia.org　Facebook、twitterも随時更新中！

技術の壁の向こうに･･･

三浦　照男
プロジェクト総責任者

ものづくりのための技術はいかなる社会にとっても大切なものです。技術開発に躍起になっている多くの国々があり、またたくさんの人々がそれを目指しています。また私自身も、そのような考えに立っていることを否めません。さて、インドの農村ではどうなのでしょうか。どうも、新技術を追い求めればよいという状況ではないようです。

７年前、日本の農村でよく使われている一輪車を導入しました。農作業の効率化を図るためです。

農家出身の農場スタッフは、３キロから５キロの収穫した野菜を小さな竹籠に入れ、それを頭に載せ、何度も何度も畑と納屋を往復するのです。一輪車を使えば、一度にたくさんの野菜を運ぶことができます。一輪車は溶接さえできれば、手作りでできる。早速、スタッフと一緒に作ってみました。直ぐに受け入れられると思っていた一輪車は、スタッフが喜んで使ってくれるまでに３年かかりました。農民のために便利だと思って作った一輪車を、村で普及するには、さらにまた数年かかることを覚悟しなくてはならないようです。

何故、私の想定と現実はこうも違ったのでしょうか。何故か歯がゆい気持ちになります。よく考えてみると同じようなことは今まで何度も経験していることに気付きます。有機質液肥、自家製の光合成細菌、又は緑肥の普及など、全てのことについて同じことが言えます。「こんな簡単な技術で健康な食べものがつくれる。」しかし、現実はそう簡単にそれらは受け入れられていないのです。

ある技術がある地域に適正であると考えられたとしても、現地の人々はそれを直ぐに受け入れようとしない現実を知る時、技術の向こうに立ちはだかる壁が何であるかを理解する必要があります。着古しのサリーの布きれがあれば、農村女性は40キロの青草を頭に乗せて数キロ運ぶことができます。古着のサリーを盗む人はいませんし、それを敢えて買う必要もないのです。自分の着古したものを使えばよいのですから。しかも、重いものを頭に載せて1～2キロ歩くことは小さい頃から訓練されているのです。一方、同じ量の青草を運ぶことができる一輪車は彼女たちにとって高価であり、野良仕事の合間に盗まれる心配をしなくてはなりません。パンクや修理代もいるのです。加えて、一輪車は小さな畦をバランスとって運ぶには練習が必要です。新しい技術に対し消極的な農村女性にとって、そのようなことをすること自体に苦手意識があるようです。

除虫菊に関するセミナーに参加した組合栽培農家と継続教育学部スタッフ。講師の飯尾氏（左前から2番目）と筆者（前列右から2番目）。

生活を改善するための技術普及は大切な仕事です。異文化が交差する中で今より優れた技術を生み出すこともあります。また、それが大きな変化や発展の原動力ともなるのです。しかし、そのような技術は私たちが考えるより容易に受け入れられるとは限りません。技術普及に立ちはだかる壁の厚さ、深さ、そして影響がどのようなものであるかを理解しながら、その作業を進めていく必要があるようです。